

発想の転換で、前橋中心街を「リハビリテーション」の全国的拠点に！

\*\*\*\*\*まえばし街中<sup>まちぢゅう</sup>リハビリテーション構想\*\*\*\*\*

斎藤 浩

前橋の中心商店街の空洞化がかくも深刻に進んだ原因は、80年代の地価の高騰とモータリゼーションに伴う商業、流通の近代化、大型化、郊外化に対するまとまった対策が中心商店街によって十分行われなかったことによるだろう。その後押し寄せるバブル崩壊と消費不況によって、個別の危機感や対策へのアイデアや行動はことごとく封じられ、衰退に歯止めがきかなくなった現状にあるものと思われる。

まだ経済成長の余韻があった80年代。近未来、世紀末をどうみるかについてよく用いられたキーワードは「高齢化、情報化、国際化」であった。機敏な企業とは意思決定方法を異にする商店街や自治体がこれらの予見に対応できなかったことは、無理からぬことかもしれない。しかし同年代を成功裏に切り抜けた都内の巣鴨や早稲田の商店街の成功例は存在する。これらを見ると時代の変化や人々の価値観の変化を捉え「バリアフリー」「環境」などの社会的テーマを掲げたまちづくりが系統的に取り組み、商店街が時代に取り残されることなく核となって社会的要請に応えた牽引者となったことが語り伝えられている。

目立った文化的経済的資源をもたない地方都市では、今日、ほぼ例外なく同じ凋落の憂き目に苦しんでおり、これは前橋に限ったことではないだろう。「水と緑と詩のまち」が打ち出せるいくつかの好条件が残されている点で、前橋はまだよいほうなのではないか。

中心商店街に昔どおりの活況や賑わいを復活させる一発解決の名案などあるはずはない。要は、時代の要請を先取りしたテーマ性を掲げ、まちづくりの関係者が目標を共有して力を合わせる事が重要なのである。

ところでわが国では少子高齢化が急速に進み、その結果これまで「家族、イエ」単位で行われてきた人間の生涯にわたる“生老病死”に対するケアが、核家族化その他の理由によって家族だけで支えることが困難になってきている。このことは今日、連日のように目を覆うような虐待や殺人の報道があとをたたないが、家族・家庭の崩壊とともに人格的崩壊が進行していることの証左であろう。事態は深刻であり、他人を信頼することができる地域社会の再生は待たなしである。商店街についても単に商業的集積地の復興策ではなく「人が生活面において多様な必要で集う場所」としての捉えなおしが迫られている。

こうした折、平成12年の介護保険の導入を契機に、家庭の介護力の喪失に対応して「介護の社会化」が強く要請され、まちづくりに関わる社会的な提言や指針も出されている。そのひとつが昨年の6月に厚労省老健局の諮問機関「高齢者介護研究会」が出した政策提言『2015年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立にむけて～』である。

この提言は、団塊の世代が老年期を迎える2015年までの介護論を展開している。高齢者が尊厳をもって暮らすためには、高齢者自身が「自助」の努力を尽くし、地域における「共助」の力を活用し、「公助」としての介護保険や公的負担を合理的に減らしつつ、これを適切に組み合わせ活用してゆくことが国民的課題であるとする。そして新しい住まい方として、老後は子供の世話にならず同居を避け、介護サービスをもった集合住居、ケアハウス、介護付き有料老人ホームなどに要介護になる前から住み替えるライフスタイルが定着すると予測する。そして現在、こうした介護付きの居住サービスが事業的に延びていることを報告している。

本会が「いきいき館」構想としてこれまで各界に提言してきたのは、この介護付き集合住宅に在宅ケア関係のサービスやNPOの活動拠点の機能を加味したものである。

さて、人の“生老病死”に対するケアとは、こども期の養育、病時の看護、高齢期の介護、死に際しての看取りをいう。いずれも医療の果たす役割が大きい。前橋市は人口10万人対比の医師数では全国有数の恵まれた市である。しかし医療、福祉は公的セクターに分類され、その立地は郊外を選びやすく、まちづくりの要素として語られることは少なかった。しかし今日、企業、学校を除き朝から人が詰めかけ、賑わう場所は病院をおいてほかにはない。

そこで提案である。中心商店街のまん中にリハビリテーションを中心とした病院を置いたらどうか。リハビリテーションとは失われた機能を回復することをいう。一方、ハビリテーションとは「更正」を意味し、備わった力を発揮し、より良く生きることをいう。この概念は能力の有無を問わず、住む、働く、余暇を自由に過ごすことを重視する北欧の人々と、何より当面の衣食住を優先する日本人の生活観の差を対比した障害者福祉の観点からの議論である。こうした視点からのリハビリ、ハビリテーションの具体的な展開は未だ不十分で課題も多く、まさにこれからの分野である。こうした問題解決をめざす研究・施療施設を中心街に誘致し、全国いや世界に通用する医療センターを目指したらどうだろうか。

そして周囲にケアハウス、有料老人ホーム、介護付き賃貸住宅、われわれが提案しているNPO拠点「いきいき館」も配置する。むろん病院に勤務する者のための簡便で安価な住宅も用意し、じっくり人口増加をはかりつつ商店街の活性化を図ったらどうか。

すでに整備された「水と緑と詩のまち」の魅力に加え、医療・福祉に近接した中心街の洒落た下宿群に入居する人口は確実に増えるはずだ。

かくして前橋の中心街は賑わいを取り戻す。